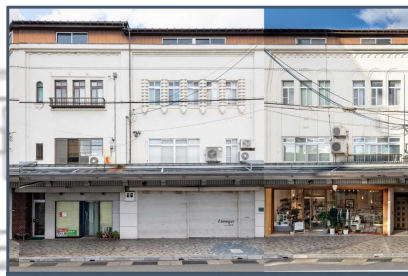


豊岡市中央町、元町

豊岡中心部では北但大震災（1925年（大正14年））からの復興期に建築された鉄筋コンクリート造（RC造）建築物や木造防火建築物の多くがまちなみとして残っており、北但大震災の2年前に発災した関東大震災後の復興遺産の多くが消失したことを踏まえると、希少性が高く、震災からの復興を今でもよく伝える重要な遺産である。



①旧豊岡町役場庁舎（国登録有形文化財）
昭和2年度にRC造2階建の豊岡町役場として建設され、その後3階部分の増築、平成23年度に保存活動により曳家で移動。現在は議場・交流センターとして活用され、震災復興のシンボルとして親しまれている。



③佐藤家及び西村家住宅（国登録有形文化財）
RC造で3戸一体の店舗併用住宅長屋。異なる間口幅や幾何学的装飾が特徴的。



⑦河見家住宅
RC造3階建の店舗併用の長屋住宅で、当初の陸屋根の外観が残る。



⑧旧豊岡貯蓄銀行
和洋折衷の装飾的な特徴を持ち、軒裏は漆喰塗りや銅板張り、隣家との間には袖うだつを設けた木造防火建築。

←至JR豊岡駅



②旧兵庫縣農工銀行豊岡支店（国登録有形文化財）
昭和9年にRC造2階建の銀行として建築され、意匠的に優れた復興建築。現在はホテルとして運営。



④旧5軒長屋
当初は5軒あったRC造2階建の3軒長屋。除却された2軒のRC造の柱や梁が今でも残る。



⑤大開通南側長屋
復興期に建築された最も大きな長屋で、大開通に面する部分をRC造とすることで、都市の防火帯として機能している。また、一部に残るモルタル塗りの外観は建設当初の面影と時代の経過を感じさせる景観となっている。



⑥鈴木家住宅
大開通南側に唯一の戸建RC造。王冠装飾が特徴的。

元町通り

大開通り

	ストーリー	17世紀末期	豊岡城下町	陣屋を中心とした内郭と円山川沿いに延びる町家で構成
		明治～大正時代	大豊岡構想	1909年（明治42）に豊岡駅が設置され、円山川治水、丹但鉄道（現京都丹後鉄道）建設、耕地整理法を活用した市街地整備等のインフラ整備等、1921年（大正10）から現在の都市の骨格となる耕地整理の事業に着手
		1925年（大正14）5月23日	北但大震災	円山川右岸下流部を震源とするM6.8の地震が発生。豊岡町の被害状況（全壊724戸、全焼1,137戸）
		1925年（大正14）～1936年（昭和11）	震災復興期	従前の耕地整理事業を継承しつつ、道路拡幅やシビックセンターの整備、耐火建築物（RC造）の推進など都市の防火性能の向上を図った
		2000年代	近年のまちづくり	旧豊岡町役場庁舎の取り壊しが議論となり、「復興建築（群）」に注目が集まる。「旧兵庫縣農工銀行豊岡支店」が国登録文化財となる。
		2010年代		豊岡震災復興建築群調査の実施、「旧豊岡町役場庁舎」及び「佐藤家及び西村家住宅」が国登録文化財となる

登録する景観の構成要素

旧豊岡町役場庁舎、旧兵庫縣農工銀行豊岡支店、佐藤家及び西村家住宅、旧5軒長屋、大開通南側長屋、鈴木家住宅、河見家住宅、旧豊岡貯蓄銀行
北但大震災からの復興で整備された景観とストーリー